

「ではね、『愉快な馬車屋』をひいてください。」「なんだ愉快な馬車屋って。ジャズか。」「ああっと、この譜面だよ。」たぬきの子は背中からまた一枚の譜面をとり出しました。ゴーシュは手にとって笑い出しました。「ふうー、何だか変な曲だなあ。よし、さあひくぞ。お前は小太鼓をたたくのか。やってみろ。」ゴーシュはたぬきの子がどうするのかと思って、ちらちらそっちを見ながらひきはじめました。するとたぬきの子は棒をもってセロのメロディのところの拍子をとってポンポンたたきはじめました。それがなかなかうまいので、ひいているうちにゴーシ

ユはこれは面白いぞと思いました。
おしまいまでひいてしまうと、ため
きの子はしばらく首をまげて考えこ
んでいるようでした。それからやっ
と考えついたというように言いまし
た「ゴーシュさんはこの二番目の糸
をひく時に遅れるんだねえ。そのお
陰でなんだか僕がつまずくようにな
るよ」ゴーシュはハッとしました。
確かにその糸はどんなに手早くひい
ても、少したってからでないと言が
出ないような気が昨夜からしていた
のでした「いや、君の言うとおりが
もしれないよ。このセロが悪いんだ
よ。もう古いのさ。」とゴーシュは
悲しそうに言いました。するとため